

「かけっこ教室」による児童の走動作変容についての検討

西田 ゆめ (高知大学)

1. 目的

小学校学習指導要領体育科編解説(2017)では、陸上運動「短距離走」の目標を、『スタンディングスタートから、素早く走り始めること』、『上体をリラックスさせて全力で走ること』としている。しかし、疾走能力を高めるための具体的な方法などは示されていない。そのため、『脚を大きく前に出す』、『腿を高く上げる』など、従前の理論である指導が中心に行われている現状がある。また、「中間疾走をリラックスして走る」や「脚を速く前に出す」など、疾走を高める技術の指導については、あまり行われていないことが考えられる。

そこで、本研究では、児童の走動作改善に向けた「かけっこ教室」の実践から、鈴木ら(2016)による児童の合理的な走動作を評価するための観察的動作評価法を用いて、児童の走動作を分析し、「かけっこ教室」の実践が、児童の走動作に与える影響について明らかにしていくことを目的とする。

2. 研究方法

- 1) 対象:K 県教育委員会主催「かけっこ教室」
県内小学校 7 校の 3~6 年生計 125 名
(1 校 1 回: 45 分)
- 2) 内容: 走のための基本姿勢、足の入替動作、走りズムなど下肢動作を中心
- 3) 分析方法: 走動作観察的動作評価基準をもとに評価し、分析

3. 結果と考察

- 1) 実施前後の走動作を分析した結果、上肢、下肢、全体項目で動きの評価得点が有意に向上した。(上肢小計: $p < 0.01$ 、下肢小計: $p < 0.01\%$ 、全体総計: $p < 0.01\%$)
- 2) 上肢の項目中では、「肘の引き出し」の得点平均が大きく向上し、0.1%の水準で有意な差を認め、下肢項目の中では、「下肢動作

の大きさ」、「挟み込み動作のタイミング」のすべての項目で得点平均が大きく向上し、0.1%の水準で有意な差を認めた。

- 3) 走運動の観察的動作評価基準から、走動作を最も未熟な動作(パターン 1)から最も成熟した動作(パターン 5)として分析を行った。その結果、実施前はパターン 2、3 が 76%を占め最も多かったが、実施後にはパターン 3 以上が 96%を占め、パターン 1 から 3、4 へ、2 から 3、4 へ、3 から 4、5 へと大きく変容した。本実践が児童の走動作改善に意味ある事として、走動作の良い動きが身に付いていくことが示唆された。

4. 結論

本研究は、児童の走動作改善のための「かけっこ教室」によって、児童の走動作改善に大きく影響していることが明らかになった。具体的には、下肢の動きが改善されたことにより、上肢の動きも連動し、身体全体を動かした走動作へ変容したことを考える。このことから、体育授業において走動作の動きに重点を置いた学習を行うことによって、走動作が改善し、さらには記録の向上にもつながることが示唆され、体育授業の中でさらに継続的に実践し、データ分析を行うことで授業実践での展開ができる教材化が求められる。

5. 主な参考文献

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説: 体育編東洋館出版社: 東京」2017
- 2) 鈴木康介・友添秀則・吉永武史・梶将徳・平山公記(2016) 疾走動作の観察的動作評価法に関する研究: 小学校 5・6 年生を分析対象とした評価基準の検討. 体育科教育学研究 32(1): 1-20